福浦黒嶋（くろばな）古墳
現地説明会

福浦地区北部にあるビシャゴ岩からみた福浦地区の全景

令和８（２０２６）年３月

赤　穂　市　教　育　委　員　会

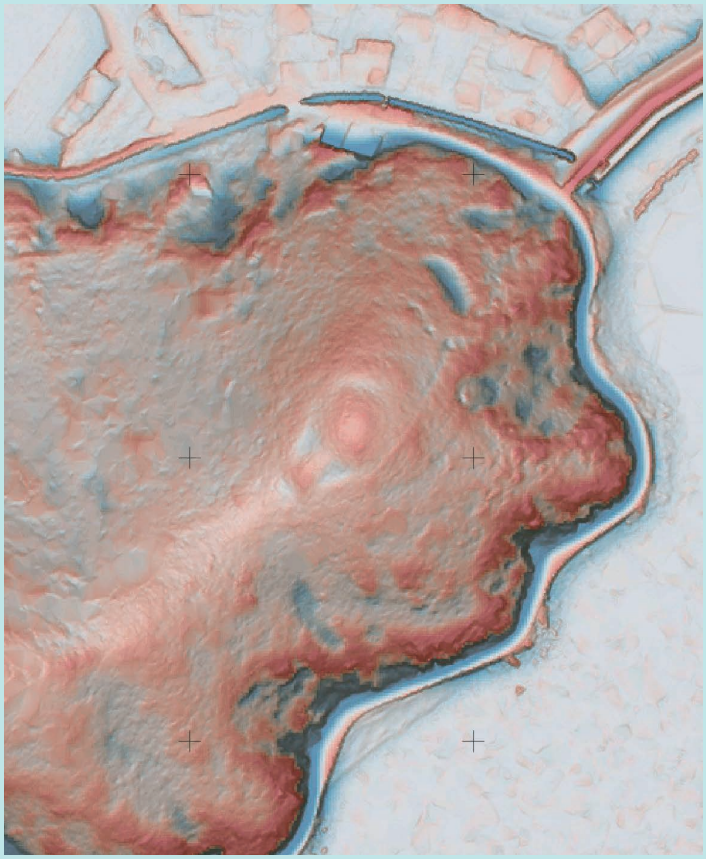
1　はじめに・発見と調査

令和５（2023）年に、兵庫県が県土全域の山林の詳細な測量データを公開しました。このデータを赤穂市教育委員会が確認したところ、赤穂市福浦地区の海岸沿いに前方後円墳状の地形を確認しました。

その後すぐに現地に向かい確認したところ、地形は前方後円墳である可能性が高いと考えられました。

前方後円墳であるとすれば、文化財として適切な保護が必要となるため、赤穂市教育委員会ではこの地形が人工的に築かれた古墳であるのかどうか、また前方後円墳であるのか、その規模や残存状態を確認するために、実際に発掘調査を実施することとしました。

発掘調査は３ヶ年行う計画としており、今回の調査は１年目の調査となります。



令和５（2023）年に公開されたＣＳ立体図
（兵庫県ＨＰより）

2　福浦地区の歴史

古墳について話す前に、赤穂市福浦地区の特別な歴史をご紹介します。

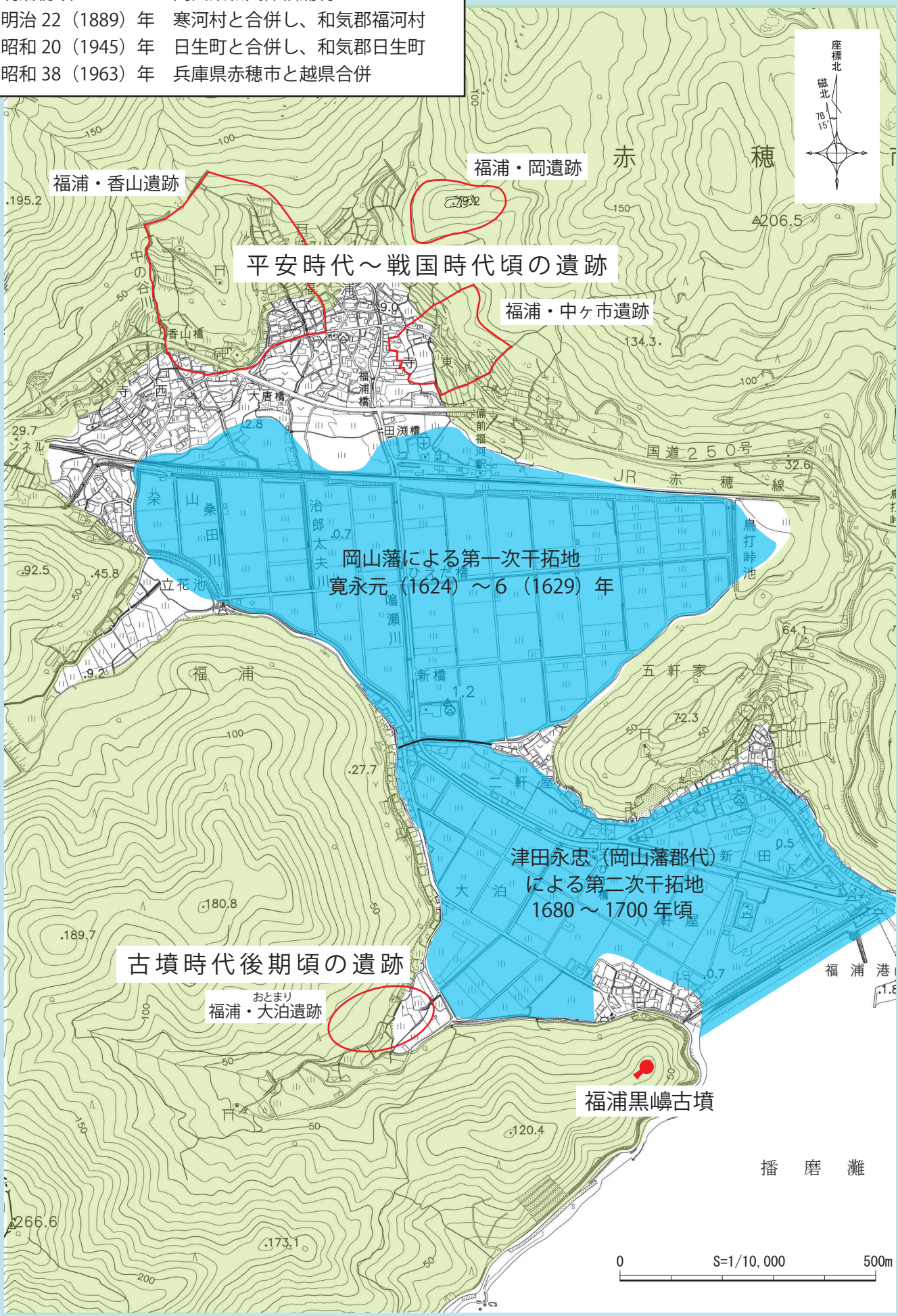
福浦地区は全国でも珍しい、県をまたいで市町村が合併する「越県合併（えっけんがっぺい）」があった地域です。

福浦地区は江戸時代には備前国和気郡に属し、岡山藩の領地となっていました。廃藩置県の後は岡山県和気郡福浦村・福浦新田村となっていました。

その後も岡山県側の町と合併し、昭和 20（1945）年には和気郡日生（ひなせ）町の一部となっていました。しかし、福浦地区は江戸時代から播磨国赤穂郡との繋がりが強く、赤穂への薪木や石材の販売、赤穂塩田への出稼ぎなどで生計をたてる住民が多くいました。そのため、何度も赤穂との合併が試みられ、大きな住民運動となりました。こうした運動の結果、福浦地区は昭和 38（1963）年に岡山県和気郡日生町から兵庫県赤穂市へ編入されることになりました。現在の JR の駅名が「備前福河駅」となっているのはこのためであり、福浦地区が備前国に属していた歴史を残しています。

このように江戸時代には備前国であった福浦地区ですが、古代には播磨・備前、どちらに属していたのかについては、実は分かっていません。平城宮・京出土木簡によれば、奈良時代には「赤穂郡」は播磨国、福浦地区の西隣にある現在の備前市日生町寒河（そうご）地区は「備前国邑久（おく）郡片上郷寒川里」とされ、備前国となっています。しかし古代の福浦地区について播磨・備前、どちらに属していたのかを直接的に示す史料は見つかっておらず、いまだに明らかになっていません。

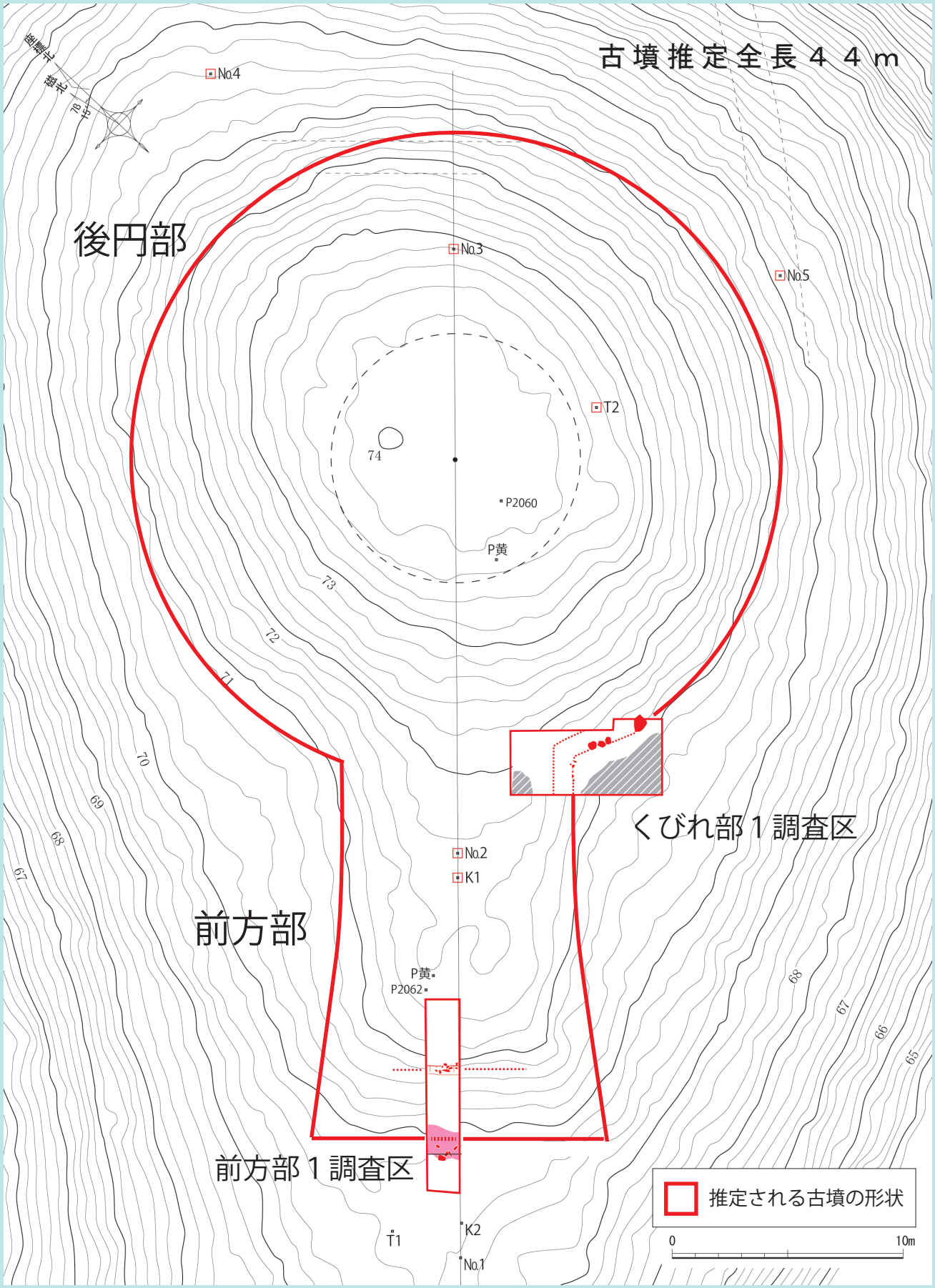
江戸時代以前	備前国和気郡福浦村・福浦新田村
明治初頭	岡山県和気郡福浦村
明治 22（1889）年	寒河村と合併し、和気郡福河村
昭和 20（1945）年	日生町と合併し、和気郡日生町
昭和 38（1963）年	兵庫県赤穂市と越県合併



周辺の遺跡

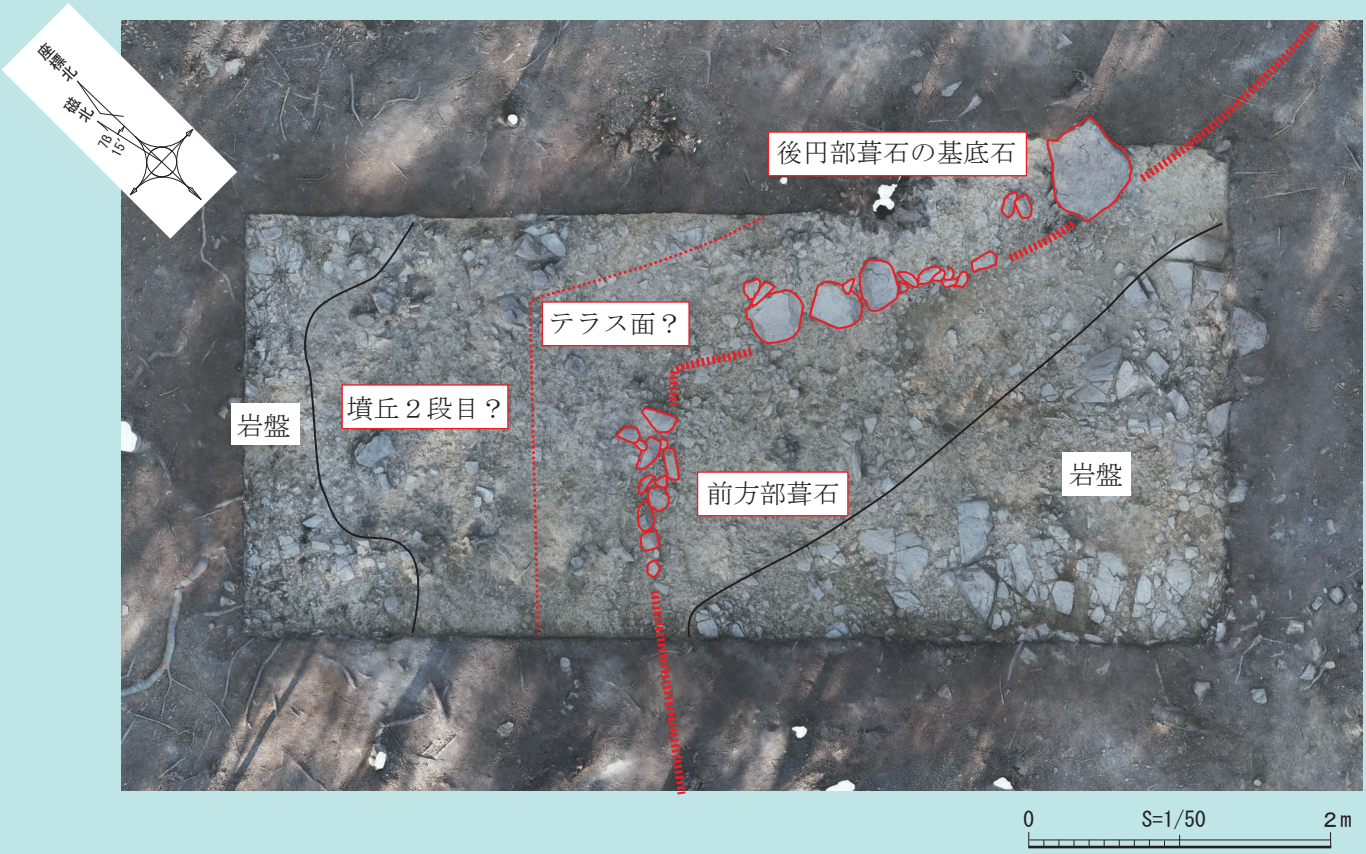
3　調査の成果

今回の発掘調査では、古墳状の地形が人工物であるかどうか、また前方後円墳であるかどうかを確かめるために、２ヶ所に調査区を設定し、調査を行いました。



墳丘測量図

くびれ部１調査区



くびれ部１調査区は、前方部と後円部の接合部分（くびれ部）を明らかにするために設定した調査区です。

調査区では、古墳の表面に設置されていた葺石（ふきいし）が確認されました。葺石はそのほとんどが流出して残りは良くありませんでしたが、最下段に据え付けられた大型の石材「基底石（きていせき）」と岩盤の上に人為的に積み上げられた盛土を確認することができました。

後円部にあたる部分の盛土･基底石列を平面的にみると、緩くカーブを描いています。また、前方部では直線的な盛土・葺石列が確認でき、後円部と前方部が一体として築かれていることが判明しました。このことから、古墳状の地形は人為的な盛土や岩盤の加工によって造られたもので、なおかつ葺石を伴う前方後円墳であることが確定しました。

後円部葺石の基底石は、長さ 40 ～ 50cm 程の大型の石材を使用し、石材を縦方向に突き立てるように設置しています。こうした特徴は古墳時代でも前期（３世紀後半～４世紀頃）の特徴と考えられており、この基底石の特徴から、この古墳がおよそ 1,700 年前に築かれた前方後円墳であると推測することができました。

また、調査区内では埴輪や土器は出土しておらず、埴輪は持たない可能性が高いと考えられます。テラス面は存在する可能性が高いですが、残存状況が悪く、その構造は確定できていません。

前方部１調査区

前方部１調査区は、前方部の構造や、前方部の端（はし）を明らかにするために設定した調査区です。

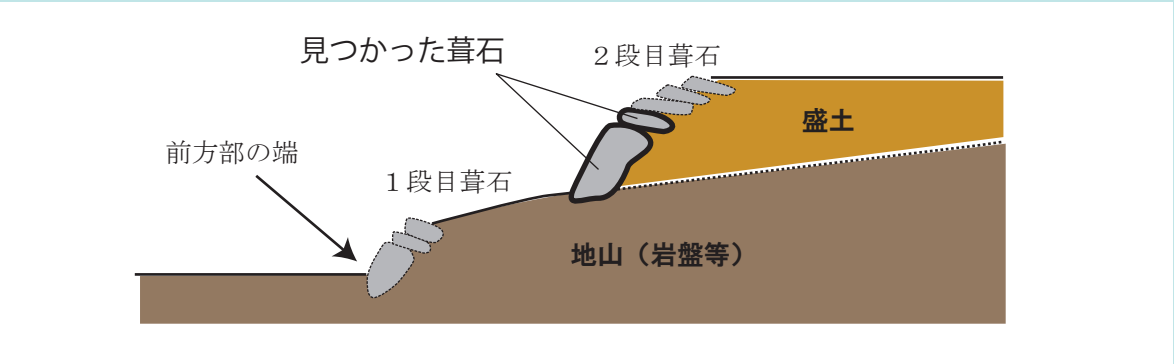
調査区では、くびれ部１調査区同様、古墳の表面に設置されていた葺石が確認されました。前方部でも葺石はその多くが流出していましたが、２段に分かれて検出されました。

古墳の端となる部分では葺石が転落した「転落石」が密集して確認されました。この転落石の下には、本来の地山と考えられる土層が人為的に掘り下げられている跡が確認できました。これは葺石基底石を設置するために掘り込まれた据付穴である可能性が高く、この部分が前方部の端になると推測されます。

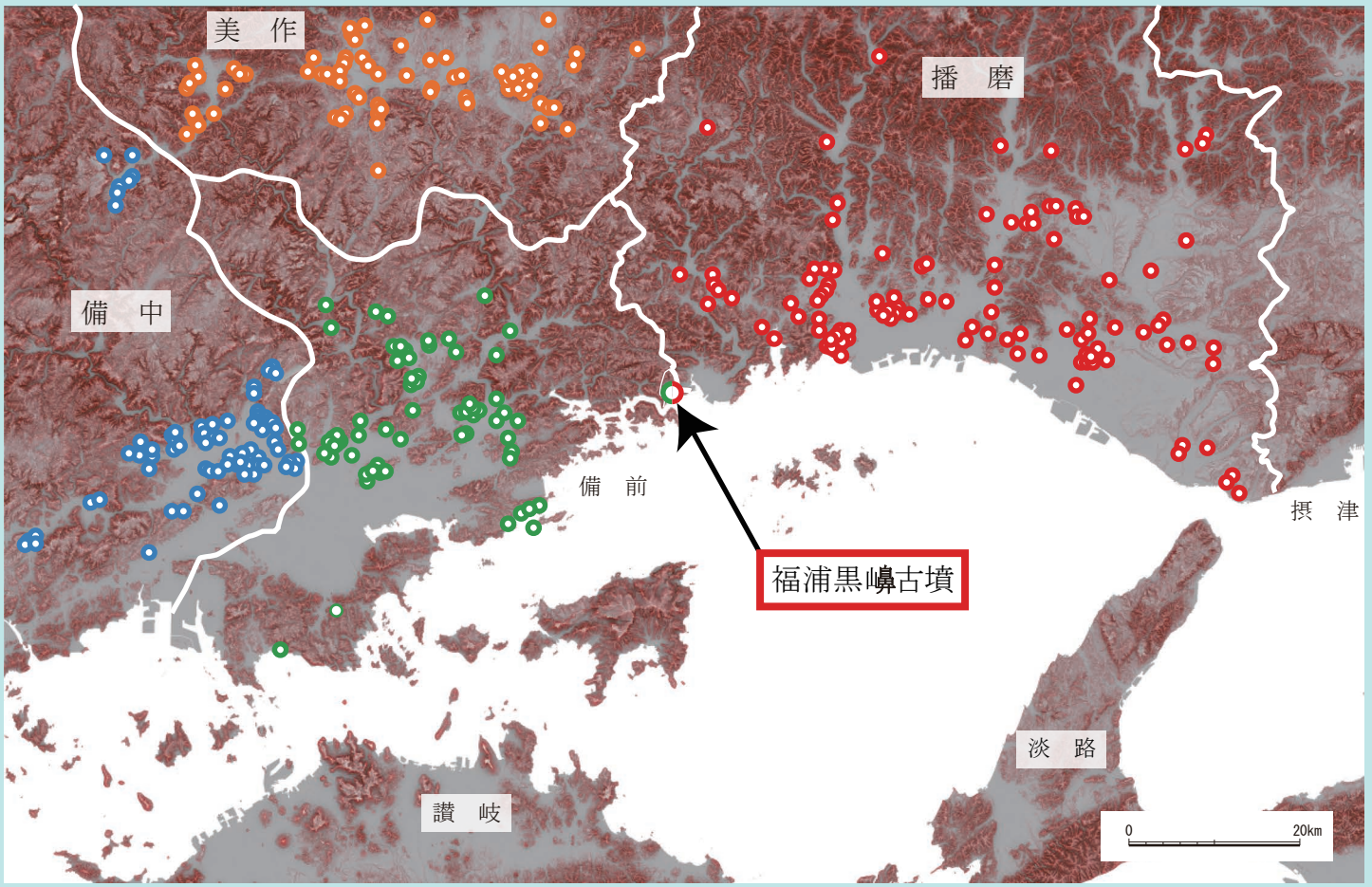
また調査区の上方では、本来の位置を保っている可能性の高い葺石が確認されました。葺石は最下段に長さ 30cm 程度のやや大型の基底石を使用し、やはり縦方向に突き立てるように設置しています。また前方部１調査区では前方部上半はすべて人為的な盛土で形成されています。

こうした状況から、前方部は斜面が１段目・テラス面・２段目と分かれる、「二段築成」であった可能性が高いことが明らかになりました。また前方部の端が明らかになったことで、古墳の全長は４４ｍと復元できました。

１点のみ土師器（はじき）の小片が出土していますが、埴輪は全く出土していません。



推定される本来の古墳のかたち（前方部の断面模式図）



美作・備中・備前・播磨の前方後円墳の分布　　下図は国土地理院地図

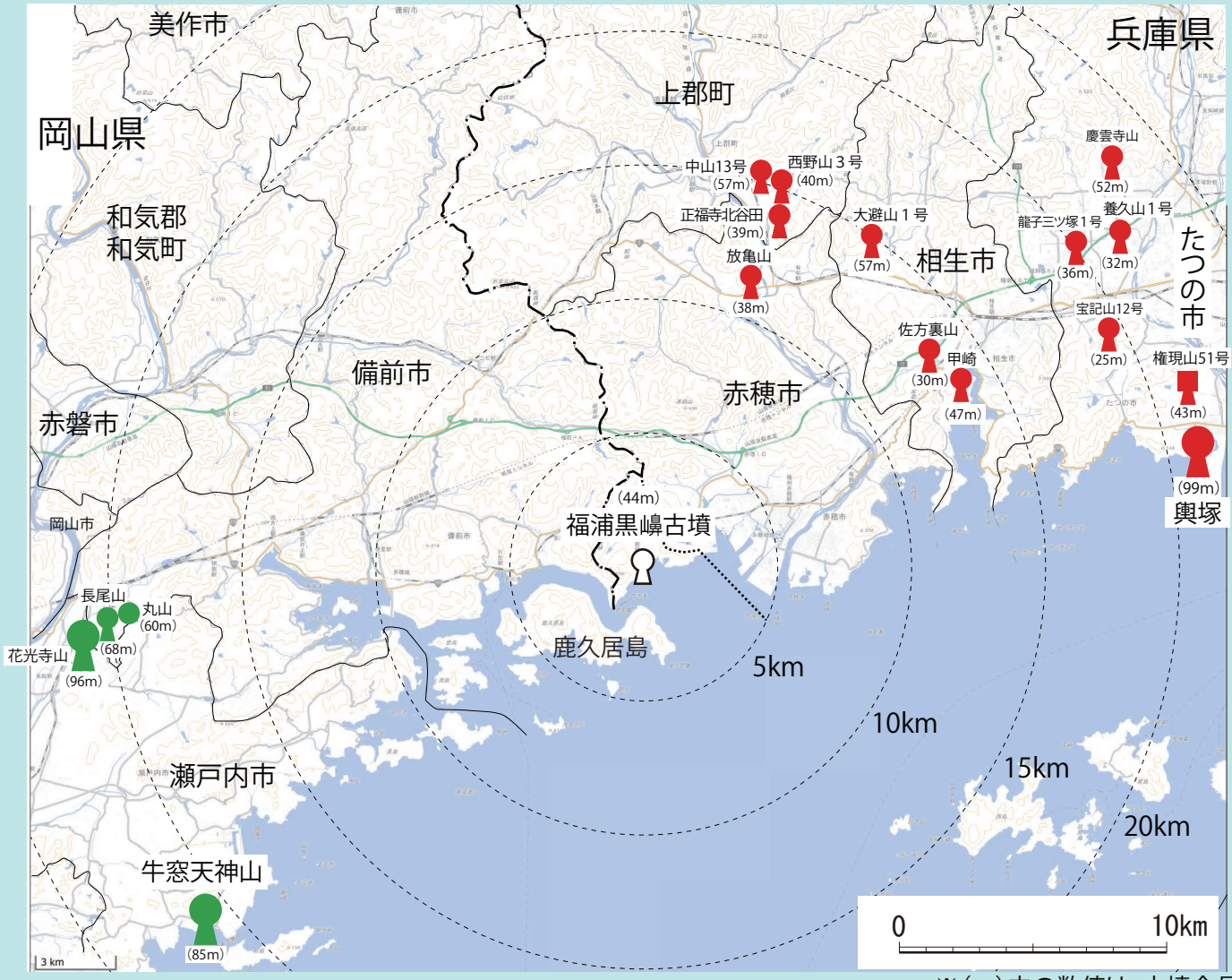
4　調査からわかること

今回の調査によって、福浦黒嶋古墳が全長 44mの前方後円墳であることが確定しました。またその年代も古墳時代前期(約1,700年前)に築かれた可能性が高いことが明らかになりました。

前方後円墳は、古墳時代にはヤマト政権と繋がりをもった有力者のみが築くことができた、格式の高い墳墓と考えられています。そのため新たに前方後円墳が発見されたことは、この地域にヤマト政権に連なる有力者が存在したことを示し、地域史を大きく塗り替える成果です。

またこの古墳の最大の特徴はその立地です。前方後円墳は全国各地に築かれていますが、その分布には疎密があることが知られています。これは古墳時代にも存在した日本列島各地域のまとまりを反映したものと考えられていますが、福浦黒嶋古墳は播磨と吉備の間にある前方後円墳の空白地帯に１つだけ、まさに「ポツン」と位置しています。

このように、福浦黒嶋古墳は「播磨と吉備の境界」という特殊な場所に位置しており、両地域にまたがって活動する特殊な被葬者の姿が推測できます。この被葬者が、播磨・吉備、どちらの影響を強く受けているのかを知ることで、当時の地域の境界や、その変化を知ることができるといえます。



下図は国土地理院地図

※（　）内の数値は、古墳全長

周辺に存在する古墳時代前期の主な古墳

また、もう１つ重要な点は周囲の景観です。福浦地区の水田は江戸時代の干拓地であるため、もともと周囲は全て海であり、大規模な平地は存在しません。そのため、「大きな集落を治めていた有力者」が被葬者であったとは考えにくいといえます。

周囲の景観をみると、古墳は播磨灘を見下ろす山の上に築かれ、明石海峡と鳴門海峡、さらに鹿久居島（かくい）と本土の間にある「うちわだの瀬戸」と呼ばれる水路状の瀬戸の出入口を監視できる、絶妙な位置にあります。「うちわだの瀬戸」は江戸時代には「どんなときでも波と潮流が穏やかで、船繋ぎに吉（よし）」とされ、古墳北側の麓にある「大泊（おとまり）」と呼ばれる場所には、干拓以前には風待ちの港があったとされています。

こうした点から考えれば、福浦黒嶋古墳の被葬者は、ヤマト政権から播磨と吉備を繋ぐ航路や港湾の管理を任されていた可能性が高いといえます。古墳時代前期には、大阪湾から瀬戸内海を通過して九州まで、海岸沿いに点々と前方後円墳が造られていますが、こうした古墳の中でも福浦黒嶋古墳は近畿と瀬戸内、播磨と吉備を中継する重要な位置にあります。

今後、さらに調査を進めて年代や構造といった古墳の特徴を明らかにしていくことで、播磨・吉備の古墳との類似点・相違点を明らかにし、より詳細な被葬者像が明らかになってくるものと考えています。